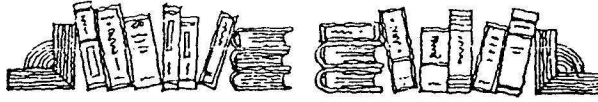


国語国文学会だより



No. 5

1991. 7

国文学科卒業生の会

春の総会・研究発表会報告

平成三年度春の総会・研究発表会が、五月三十日(木)、
香雪館四〇一番教室において開催されました。

開会の辞

国語国文学会会長挨拶 浅野三平先生

(3) 日本語・中国語における完了表現

―主に「た」と「了」の意味について―

大学院博士課程後期在学 李 琦娜氏

第一部 総会 午後一時三十分

(1) 国語国文学会委員長および役員紹介(卒業生の会・在学生の会)

(2) 平成二年度活動報告・会計報告

(3) 平成三年度活動計画・予算案

なお(2)(3)については在学生・卒業生よりそれぞれ報告・説明があり、各案件を審議し、承認されました。

(4) 自主ゼミ紹介・報告

(5) 奨学金授与

久松潜一奨学金 二名

上村悦子奨学金 二名

中島斌雄奨学金 一名

第二部 研究発表会 午後二時三十分

(1) 後京極良経の漢詩文受容

平成二年度卒業生 幡 和可子氏

(2) 『ころ』論―迷走する自我―

平成二年度卒業生 川嶋 美穂氏

閉会の辞 懇親会

午後四時

昨年度より卒業生の出席者も多く、研究発表会では、熱意溢れる各発表に対し、活発な質疑応答が行われました。

閉会後図書館会議室において、先生方、在学生、卒業生をまじえ、引継ぎをかねて、懇親会が行われました。国語国文学会の運営、今後の方針、在学生と卒業生の交流などについて語り合い、有意義で楽しいひと時でした。

秋季大会・公開講演会は、

平成三年十一月三十日(土)開催の予定です。

(研究発表ご希望の方は、八月十五日迄に、はがきで、研究室宛、お申し込み下さい。)

当日は、研究発表、講演会、懇親会を昨年度にもまして、さらに充実したものにしたいと計画いたしましたので、お誘い合わせの上、ご出席下さい。詳細が決まり次第ご案内申し上げます。

平成二年度公開講演会より

ゲーテとシラー

亀山 健吉

ゲーテとシラーは、ドイツ文芸史上の双壁であるばかりでなく、世界文学においてもそれぞれ独自の光彩を放っている偉大な文人である。

この二人が十九世紀の初頭、ドイツの小国ヴァイマル公国の首都、人口一万にも満たない小都市ヴァイマルに共に住みつき、歩いて五分もかからない至近距離のところに邸を構え、十年間近くにわたって絶えず語り合いつつ共同して詩篇を編み、相携えて演劇活動を行ったことは、人類の歴史の中でもきわめて珍しい出来事であったと言つてよい。もともと同じ文人とはいつても、両者は、資質・性格・関心など対蹠的な関係にあった。ゲーテはシラーよりちようど十歳年長であるが、その八十余年の生涯を通じ、経済的にも、社会的地位にも恵まれていたのに対し、シラーの方は、その四十五年の短い一生の間絶えず貧困に苦しみ、若い頃には反体制的な活動のために官憲に追われ、流浪の生活を送らざるを得なかった。

ゲーテは直観を重んじて〈見る〉ことによって事物の本質を把握しようとしたのに対し、

し、シラーの方は、哲学的・論理的思考を重要視し、カント哲学の圧倒的な影響のもとに、体系的な美学・芸術学を確立した。

ゲーテは、詩人・小説家・劇作家であるのみならず、地質学・光学・植物学・解剖学の分野でも多くの業績を遺した自然科学者でもあったが、シラーは、詩人・劇作家であるほか、美学者として足跡を印したばかりでなく、すぐれた歴史学者として一時イェナ大学で教鞭を取ったこともあった。

ゲーテは、ヴァイマル公国の要人として国王の最高顧問であり、政治・経済・軍事の責任者にもなったが、シラーは『群盗』『ヴィルヘルム・テル』等の作品に見られるように、体制批判の姿勢が顕著で、権力に對抗する個人の〈自由〉を強く主張し続けた。このように全く性格を異にする二人が、シラーの晩年のほぼ十年間、緊密な関係を保って接触し続けたのであるが、その接触の様子は、結果的には、相互補完的なものであったと言つてよい。

ゲーテもシラーも、ともに相手の業績を高く評価し、互いに尊敬し合っていたことは事実である。と同時に、これほど境遇・性格を異にする二人は、人間的な感情の面では、当然反撥し合う点多々あったものと思われる。事実、ゲーテが初めてシラーに会ったときには、「私は彼が大嫌いだ。」と書き残しているほどである。内面の最深部にある相手に対する感情は、それぞれの心の中の奥深い秘密で

あるから、二人ともそれほどあからさまには書き留めてはいない。

ゲーテとシラーそれぞれの相手に対する尊敬と厭悪、業績や能力に対する評価と人間的な反撥、を文学的な形で明らかにしようとする試みたのが、二十世紀のすぐれた作家トーマス・マンである。

マンは、長篇小説『ヴァイマルにおけるロッテ』の第七章で、ある朝まだきふと目覚めたゲーテの心象風景を描いている。その中で繰り返し登場するのがシラーで（この作品では、シラーの没後十余年を経た時期に設定されている）、このシラー像に対し、七十歳近いゲーテは、「お前は一言で言えば病人だ。そして自由ばかり口にする馬鹿な男だ。」と語りかけてゆく。同時に、「この病人は、実は精神の貴族であり、この馬鹿者は実は人の心をこよなく動かした。」と自分に言い聞かせることになっている。

また、トーマス・マンの短篇『重苦しい時』は、シラーの捉えたゲーテ像が主題になつていて、三十七歳当時のシラーが深夜執筆に疲れて眠れぬままに、さまざまな想念が彼の脳裡を駆けめぐり、その中でも執拗にゲーテが登場することになっている。ゲーテに対するシラーの感情を、マンは「憧れに満ちた敵意」として描いている。トーマス・マンの両者に対する解析はそれなりに当たっているものと思われる。

三島由紀夫

―最後の作品をめぐる―

小島 千加子

今年（平成二年）は三島さんの二十年祭ということで、新しい資料も随分出ましたし、原作品も意匠を変えて出ました。映画、演劇の面でも盛り沢山の趣向がありました。没後二十年も経ってこれだけ人気を保つというのは、やはりすごいと思います。外国の人達が三島という夢中になりますね。翻訳されている作品の数も多いし、外国で芝居が上演されることも多いのです。皮肉なことに、日本の劇団がやる芝居より、外国の劇団がやる芝居の方が質も程度も高い。三島さんが、日本の文学という狭い域を脱して、世界的な市民権を得たということだと思います。日本という血肉の上に西欧の小説の方法も取入れ、独自の実を結ばせることが出来たわけですが、根本にある「日本的な心情」が、三島さんの悲劇にも結びつく、と思います。

最後の小説が「豊饒の海」ですが、四部作で、連載回数にして63回という長篇です。

「月の面にある海」というイメージを持たれはじめは「月の宴」という題を考えたようでもあります。月の海の名のラテン語の訳語「豊饒の海」と、最終的に決められました。

三島さんが学習院の学生であった頃、三島さんの詩集を出そうと企てた一人の友人にあって、「この詩集には、荒涼たる月世界の水なき海の名：生の輝かしい幻影と、死の本体とを象徴する名、『豊饒の海』という名を与えよう」と手紙を書いていますから、若い時から、この題名が胸にあつたわけです。このライフワークが書き出されたのは昭和四十年からですが、構想は三五、六年頃から立つておりました。

四部作の第一巻が「春の雪」、作者自身が言うように「和魂」を想定しているわけですが、古典的な格調の高い文章の、王朝風恋愛物語です。第二巻が「奔馬」、これは「荒魂」に当たりますが、三島さんの言う文武両道の、武の世界が出てきます。「奔馬」に入る前に、夏、大神神社に三日間参籠なさいました。三島さんは小説を書く時、本当に心血を注いで書きますが、参籠して滝にまで打たれるというのは、異常なほどの熱心さです。この熱意に呼応するように後の楯の会の母体となる人たちが三島さんの前に現れる。その頃から三島さんは時折、「恐いみたいだ。小説に書いたことが現実になって現れる。時には事実の方が小説に先行することがある。」と口にするようになりました。「奔馬」の途中で、次の巻「暁の寺」の舞台となるタイ国へ取材にいらしてですが、その時インドにも行き、ベナレスで、三島さんは魂が震えるほど強烈な感動を受けられた。輪廻転生の思想を、日常茶飯

に表わしているような宗教的慣習を目のあたりにされたのです。小説の仮構と、現前する事実とが呼応し合う「くしび」を感じていた三島さんにとって、理性と思惟の力を超える、圧倒的な悠久のエネルギーマをもちに浴びたことが、何らかの転機のはずみとなったかもしれないのです。第三巻「暁の寺」は、輪廻転生の思想を、仏教の大乗論、小乗論、密教と各分野に互り、物語に添いつつ細かく述べた重厚な巻ですが、この終わり近い頃には、もう決起のことが頭にある。第四巻「天人五衰」に入る前、二ヶ月休んだ間に決起の企てがなされます。四部作を書く間中、「自分の総てを注ぐ」としばしば言われたのですが、三巻までは各々19回か20回の回数をかけているのに、最終巻は7回で終わっています。一回の枚数が増えているとは言え、惜しくも傷ましい思いが致します。しかし、その終章は最期を飾るにふさわしく、実に美しい。

三島さんは、自分の青春と長くもない生涯をこの物語に託しましたが、同時にそれは、明治維新以降矛盾を孕んだままの日本の一面とオーヴァラップさせたような結果になっています。まことに暗示的な死であり、作品であって、今後、日本の文芸、文化を考える原点として、三島さんも「豊饒の海」も、示唆に富む存在であり続けることと思います。

（国文学科旧46回生）

* 亀山健吉先生、小島千加子氏に、講演
要旨の原稿をご執筆いただきました。

「自主ゼミ」報告一

*平安文学談話会

平安文学に関する研究について発表の後、談話会形式で行います。第一回は、六月二八日杉田まゆ子氏「藤原公任集の成立」、第二回、九月二七日安藤武子氏「枕草子の服飾について」です。年四回の予定。毎回金曜日五時半から致します。みな様のご参加をお待ちしています。詳細は、左記までご連絡下さい。

連絡先 高野晴代 ☎三三七〇一六八〇六

*皇女研究会 (旧内親王総覧作成ゼミ)

現在「内親王総覧」平安朝篇を作成中。史料から歴代天皇の娘に関する記事を抜き出し、カード化しているところです。

個人作業中心ですが、偶数月の第二土曜日には図書館一階の共同研究室に集まり、情報交換や打ち合せをしています。

今年度中に、第一次作業終了予定。

連絡先 柳澤理恵子

☎〇四五(八四一)六五二五楠木方

*国文学科卒業生の文学活動をたどって

近々講師を招き、第一回の会を開き、方針、日程など具体的な活動に入ります。

連絡先 斉藤令子 ☎三七八一―六三八〇

*古代中世文化論

第四月曜 午後一・三〇―。一九八九年七月スタート。「洛陽田楽記(大江匡房)」「新猿楽記(藤原明衡)」を終え、この四月から「風姿花伝(世阿弥)」を始めました。民族芸能、能、文楽の鑑賞も随時行っています。新入会者歓迎します。お気軽にお問い合わせ下さい。

連絡先 山田佐和子 ☎三九七二―四八四三

*能楽研究会

謡曲指導役の都合で、定期的な稽古はまだ始まっておりませんが、取りあえずは本年八月二十四日(土) 全国大学生・OB謡曲連合会議会―於国立能楽堂(二階) 研修舞台―に参加予定。観世流では素謡で熊野・小督・半部等の中から一曲。宝生流も参加します。又、秋には桜楓会館和室で、観世・宝生合同の素謡会を開く計画があります。

連絡先 巨理美代子 ☎三九四七―二〇四九

*中島斌雄先生の俳句を読みながら

場所 日本女子大学人間社会学部会議室

(川崎市多摩区西生田一―一―)

小田急線 読売ランド前駅下車)

連絡先 綾野道江

☎〇四四―九六六―五四二五

伝言板

会費納入のお願い

本年度の会費千円の納入をお願い致します。同封の払込用紙の裏面に、氏名・電話番号・回生を御記入の上、郵便局からお振込み下さい。(本会から入金のお知らせは致しませんので、払込の際の受領証を大切にお持ち下さい)

なお、本年度分会費をすでに入金して下さった方には払込用紙を同封しておりませんので、御了承下さい。

御寄付の報告

旧制28回生の故平川ヨシノ様御遺族から五万円、旧制31回生南美枝子様・旧制40回生鈴木ハマ子様・旧制46回生児玉久美子様から連名で五万円の御寄付を頂きました。厚く御礼申し上げます。

当会の運営について

国語国文学会卒業生の会は、回生委員会、またその中の常任委員会、さらに学校側委員とによる運営委員会の討議によって運営されています。ご希望、ご意見をお寄せください。

一九九一年七月一〇日

発行・日本女子大学国語国文学会

卒業生の会

企画係までお問い合わせ下さい。